

異文化適応の問題について

—金沢大学での留学生生活—

八重澤 美知子

I. 問題と目的

21世紀初頭には留学生10万人を受け入れる計画に沿って、文部省の統計でも明らかなように近年の留学生の増加は著しく、それに伴って金沢大学でも特にここ2、3年多くの留学生の姿が見られるようになった。それは同時に留学生の多様化を意味し、様々な背景やニーズを持ち、また personality や行動様式、年齢等も異なる留学生に対し、教育と研究の場をいかに提供したらよいかを考えさせることになった。また、これと並行する形で起こってきたのが日本の生活になじまず、適応上の問題を抱えている留学生の存在である。一般に、人がこれまで未知だった文化と接触するとき、少なからず動揺したり戸惑いを感じたりする経験は誰しも持つことが知られている。しかしその混乱の程度は個人のこれまでの経験や personality さらには現在置かれている立場をはじめとする諸要因によって異なっている。そしていわゆるカルチャー・ショック——異文化との接触において生ずる心理的反応の状態¹⁾——は心配される negative な側面だけでなく、これをきっかけとしてより深い自己理解並びに異文化理解が進展するという positive な面をも合わせ持ったものである。

これらを考慮して、今回の調査では、金沢大学の留学生たちがどのような留学生生活を送っているのかを明らかにすることを第一の目的とする。留学生像を把握することによって、理解が深まればより一層の適切な教育が行われるからであり、ひいては、不適応状態に陥る以前の予防となることが期待されるからである。さらに、異文化での生活をどのように受け止めているかを明らかにすることにより、異文化適応の問題について明らかにすることを第二の目的とする。

II. 方 法

質問紙調査法による。質問紙は岩男・萩原が作成し、1975、1985年の調査に用いたものを使用した。その理由として

- ①全体的な傾向を比較する際の準拠枠が既に存在するということ
- ②質問紙で用いる言葉の使用について、異文化間での共通理解に不安があったことなどが上げられる。しかしその一方で、調査用紙に記入する留学生の理解力や負担の程度を考慮して、教育や相談関係に最低必要な項目のみを選択し、さらに尺度の簡素化をはかりながら、全34項目から成る調査用紙を作成した。これらの項目により明らかにする領域は次の通りである。

- ①個人的な背景（年齢、国籍、専攻など）
- ②留学について（目的、帰国後の予定など）
- ③経

済面（生活費、アルバイトの状況など） ④住居面（居住形態、満足度など） ⑤日本語習得について（来日前の準備状況など） ⑥留学生生活（満足度、友人関係など） ⑦異文化適応（障害の程度、日本人観など） ⑧日本や金沢での生活についての自由記述

調査実施期間は1991年2月～3月であり、金沢大学に在学するすべての留学生（113名）に対し、所属学部の学生係を通じて用紙を配布し、同封の返信用封筒での郵送による回収を学生部学生課留学生係で行った。

なお、回収率は47.8%（54名）であった。

Ⅲ．結果と考察

(1) 留学生生活全体の概要と考察

〈回答者のプロフィール〉 本調査の回答者である男性43名・女性11名・計54名の内訳は、表1に見られるとおりである。すなわち平均年齢31.2才、アジア出身の学生が回答者の9割を越え、なかでも「漢字圏」と言われる中国、韓国、台湾の出身者がアジア全体の75%を占める。

未婚者よりも既婚者が多く、その既婚者の半数以上が、家族とともに生活している。在日期间（1991年3月の時点で）は、最も長い人で7年、最も短い人で2か月で、その構成は表2のようになっている。

〈留学の目的と帰国後の予定〉

理系・留学生の「留学目的」のほとんどが「学位の取得」（修士6・博士23・その他1）に関するもので占められ、「日本語学習」・「日本文化理解」に対するニーズを大きく上回る。一方、文系・留学生においては、「学位の取得」（修士5・博士1）と並んで「日本語学習」・「日本文化理解」を目的としており、理系・文系で異なる留学目的が指摘できる。従って帰国後の予定も、「大学の先生・教官」「研究者・研究所」など、学位と関連した職業プランを答えたものが多く見られる。なお、男性が多様な職種を上げたのと比較して、女性の回答の画一性及び見通しの立たない状況は気になる点である。（表3・4参照）

〈経済的側面〉

留学生のトータルな生活を支える重要度の高いものとして、経済的な裏付けは欠かせないが、物価の高さを指摘される日本でどのような生活をしているのかを次に尋ねてみた。

回答者全体の55.6%が日本あるいは出身国からの奨学金を得ており、全くの私費留学生は37.0%である（不明が7.4%）。そのために私費留学生の多くはアルバイトをしながらの留学生活を送ることになる。24名がアルバイト経験者であり、その内容も特技（語学など）を生かしたものから、単純労働まで様々である。

また、一か月にかかる費用の平均は11.2万円で、最高額27.95万円から最低額4.5万円まで大きな開きが認められるが、家族と一緒にかどうか、あるいは住居を安く提供されているかどうかなどの生活形態と個人的な事情が反映されている。（表5参照）

表1 回答者のプロフィール

	N (%)	平均年齢	理・文系		アジア・他地域		質問紙への記入			既婚・未婚		既婚者で現在は	
							日本語	英語	両方			単身	家族と
m	43(79.6)	31.1	35	8	40	3	34	7	2	33	10	16	17
f	11(20.4)	31.5	2	9	11	0	8	3	0	8	3	3	5
計	54	31.2	37	17	51	3	42	10	2	41	13	19	22

表2 在日期間(1991.3月迄)

1年未満	14(25.9)
1～2年未満	18(33.3)
2～3年未満	7(13.0)
3～4年未満	7(13.0)
4～5年未満	1(1.8)
5年以上	7(13.0)
計	54(100.0%)

表3 留学目的・理系

順位	学位	日本語	日本文化	特殊技術	他
1	32		1	4	
2	1	11	5	4	1
3		3	6	1	2
4	1	1	2	1	
5				1	
計	34	15	14	11	3

表4 留学目的・文系

順位	学位	日本語	日本文化	特殊技術	他
1	7	3	3	1	1
2	1	7	3	1	
3	2	1	1		
4			1	1	
5					
計	10	11	8	3	1

表5 一カ月の費用

5万円未満	2
5～10万未満	21
10～15万円未満	10
15～20万円未満	17
20万円以上	3
N. A.	1
平均	11.2万円
	54

〈住居形態〉

学生寮に住む留学生は18.5%とむしろ少数で、アパート等民間の住居で生活している留学生の多いことがわかる。その居住状態については、満足な点として「地理的理由」(例えば「大学まで近い」・「交通の便が良い」等)及び「居住スペース」,「家賃」を答えたものが多く、反面不満足な点として、「うるさい」ことと「家賃の高さ」,「お風呂がない」,「大学まで遠い」等が上げられている。しかし回答者全体としての満足度はまあまあで「かなり満足」「まあ満足」を合わせたものが半数を越える。

なお「現在の住居にかなり不満である」と答えた全員が学生寮に住んでおり、「うるさい」・「学校まで遠い」ことを理由としている。

〈日本語習得状況〉

来日前の出身国での日本語学習は8割近い回答者が何らかの形態で学習してきている。しかしその反面、来日後に初めて日本語学習と取り組む留学生もおり、日本語の教育機関が自国にあるかどうかで日本語教育は様々なレベルからスタートすることが要請される。

自分自身の「日本語能力」に対する自己評価は表7に示す通りであるが、あくまでも自己評価であるため評価の個人差に留意して見る必要がある。留学生にとっては「正式なレポートにまとめる」などの作業が容易でないことがわかる。

〈留学生生活〉

「現在の不満」を尋ねた質問には「学習面」よりもむしろ「生活状況」や「日本人の態度」に関するもののほうが多い。これまでの他の研究によれば（岩男，萩原 1988）留学生の出身地にかかわらず，来日してからの期間が長くなればなるほど，そして日本語が上達するほど日本人の態度を厳しく評価するようになることが指摘されているが，本調査においてもややその傾向が認められよう。すなわち「日本人の態度」に不満である回答者の在日期間の平均は3年7か月と比較的長く，5年以上滞在している者の半数以上が不満に思っている。

日本での生活で困った時には，ほとんどの回答者が相談する人を持っており，同じ国や日本人の「友人」と並んで「指導教官」が大きな役割を果たしていることが理解されよう。その一方で，少数ではあるが「相談できる人がいない」という回答もある。

また日本で取得する「学位の評価」は，全体的には自国と同レベルかもしくはそれ以上の高い評価を得ると考えている。しかしながら，「日本への留学の勧め」となると「多分」・「絶対」勧めないという回答が寄せられ気に懸かるところではある。「絶対に勧めない」と答えた留学生の中の一人名と後日面接の機会を得たが，「期待した勉強が出来ないこと」を最大の理由にあげていた。その他「日本以外の国への留学を希望していた」などの理由であった。

表6 来日前の日本語学習状況及び日本語学習機関

未習得	12
習得	42
・日本語学校	9
・自国の大学	19
・家庭教師	0
・独学	12
・その他	7

表8 現在の不満

日常生活状況	17
学校での勉強の内容	6
留学生に対する日本人の態度	12
なし	4
全部	2
あてはまらない	2
N. A.	12

表7 各項目（日本語で）「いいえ（できない）」と答えた人数

1 買い物などの日常生活に必要な簡単なこと	0
2 友達と会話	1
3 電話での話	2
4 授業で質問や議論	11
5 自分の専門分野の講義の理解	10
6 ラジオ・テレビのニュースの理解	9
7 新聞の記事を読む	13
8 お礼の手紙など簡単な手紙を書く	7
9 自分の研究を正式なレポートにまとめる	16
10 ひらがなを読める	2
11 ひらがなを書ける	1
12 カタカナを読める	5
13 カタカナを書ける	6

表9 困った時の相談者

相談者あり	49
指導教官	33
日本人の友達	31
同じ国の友達	35
カウンセラー	5
その他	4
相談者なし	2
N. A.	3
計	54

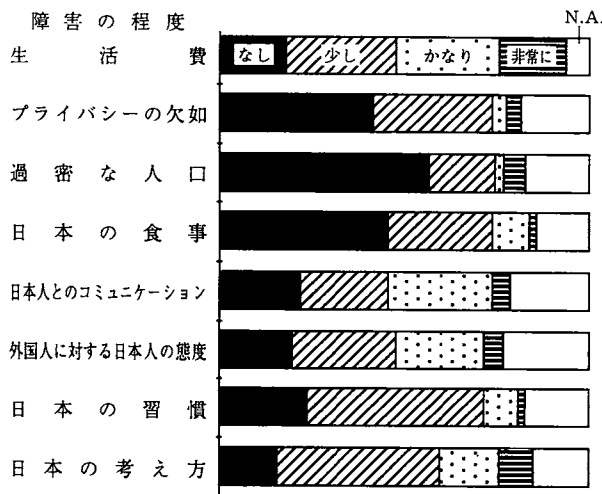
〈異文化適応〉

日本での生活は、留学生にとっては新たな文化との出会いでもあり、その際生ずる困難やギャップまた日本人観などを尋ねた。

「日本に適応する上での障害」として「日本人とのコミュニケーション」・「外国人に対する日本人の態度」という人間関係の側面が上がっているのが注目されよう。(図1参照) 留学生を対象としたこれまでのいくつかの研究が度々指摘してきた、「日本社会の閉鎖性」すなわちウチとソトとに分ける対人意識のあり方並びに「異文化間の序列意識」を映し出した結果と見ることができる。これに関する意見を自由記述の中から抽出すると次のようなものに代表される。

「留学生に対する指示が多く、日本人は自分たちだけが良いと思っている」、「色々な外国人に対する日本人の態度は全然違う」、「ガイジンと言われたり、アパートを探すときに人種差別を経験した」等。

図1 生活適応上の障害の程度



これまで見てきたことはさらに次の質問である「日本の社会、文化、教育に対する意見」でも裏付けられよう。(表10参照)

しかしこれらのことは、逆に人間関係の中で経験した満足感が留学生生活を positiveなものへと変換させる可能性を持つことを示している。「日本での最も愉快的出来事」の多くもまた「病気や道に迷った時に親切にされた」・「暖かく、やさしい人々との出会い」などの人間関係に言及している点が注目される。

また、「生活費」に対する障害には、全く障害を感じない人もいるなど状況の個人差が大きいことがわかる。

次に「日本人観」であるが、岩男・萩原の研究が指摘するこれまでの結果とほとんど同様な傾向が本調査からも明らかにされている。すなわち、留学生の持つ日本人のイメージで最も安定しているものは、

表10 日本の社会・文化・教育に関する意見

意 見	賛成	やや賛成	やや反対	反対	他	N.A.
日本の大学の授業はあまりに論理的で、実際に役立つことがない。	1	9	20	12	3	9
欧米人に接するときと他の外国人に接するときとは、日本人の態度が異なっている。	29	15	1	6		3
日本人は自分たちが外国人にどう思われているかを気にしすぎる	12	20	10	6		6
いかに日本語がうまくても、どんなに長く日本にいても、外国人が日本社会に受け入れられることはきわめて難しい。	19	14	9	7	1	4
日本の文化はあなたの国の文化と多くの点で共通性をもっている。	30	15	4	4		1

「勤勉」・「競争心が強い」

であり、ステレオタイプの日本人観とも言える。これに続くのが、

「責任感がある」・「親切」・「信頼できる」

と positive な項目が上がる一方で、

「男女不平等」・「偏見がある」

などの見解を示している。

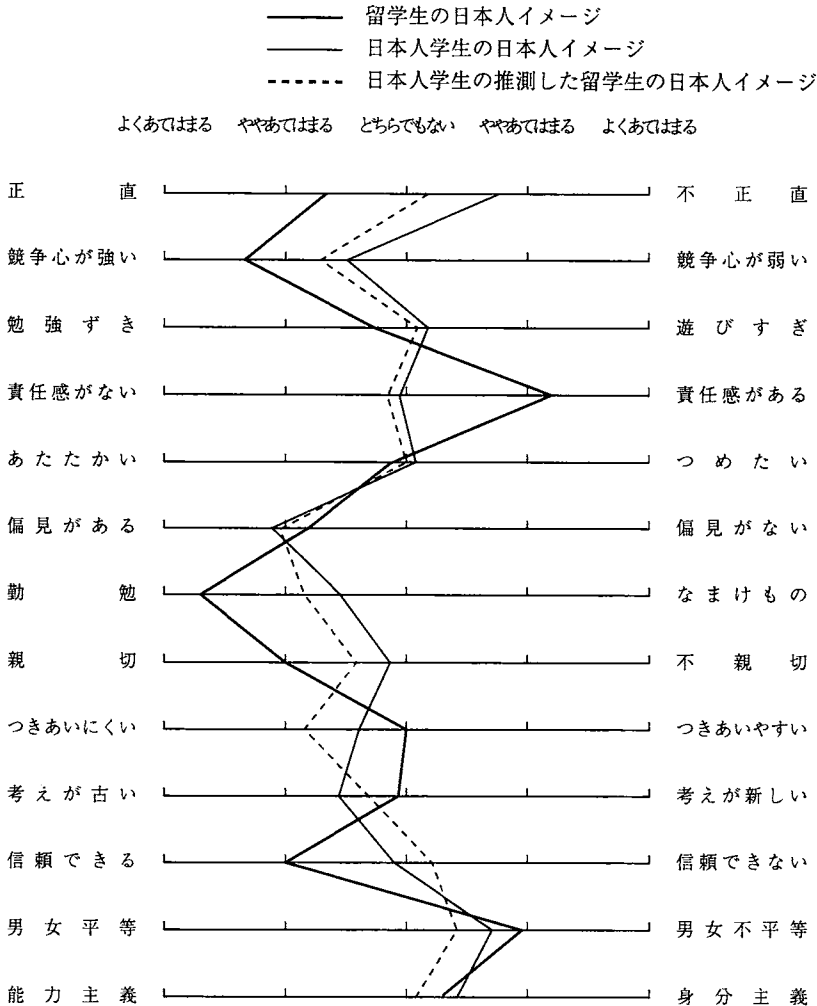
このような留学生の指摘した日本人観を検討する際の手がかりとして、日本人学生（金沢大学・文学部・法学部・経済学部の二年生男子48名、女子55名の計103名 1991年6月実施）の持つ「日本人のイメージ」及び「留学生の持つ日本人イメージの推測」を明らかにし、留学生との比較を行った。全体的な傾向としては、日本人学生よりも留学生のほうが日本人を好意的に捉えているという点である。日本人学生の見た「日本人」は、「不正直」・「偏見がある」・「考えが古い」・「男女不平等」など、negative な評価が見られる。留学生・日本人学生のこうした捉え方の違いに影響を与えている要因には、「日本人について」とする教示の仕方が極めて漠然としたものであったため、留学生がステレオタイプな日本人像に準拠しながら答える一方で日本人学生は現代的な日本人像を捉えた反応のギャップが映し出されていると考えられる。

また、日本人学生が推測した「留学生の持つ日本人イメージ」は当然のことながら自らの持つ日本人イメージと類似したものであり、実際の留学生の日本人イメージとの間には大きな隔たりが存在することになる。くい違いの程度の大きな項目を見ると

「正直」・「責任感がある」・「勤勉」・「つきあいやすい」・「信頼できる」

などで、いずれも、日本人は留学生から negative な評価を受けているであろうと日本人学生は考えている。とりわけ、「つきあいやすい」・「信頼できる」の二項目は、留学生と日本人学生間のコミュニケーションのなさを裏付けるものと言えよう。事実、調査対象となった日本人学生の47.3%が留学生と話したことがあるに過ぎず、学生間の交流はこれからというのが今の段階である。なお注目すべきは、日本人学生は留学生の目にはそれほど日本人は「男女不平等」だとは映っていない、と考えている点である。また、留学生と話した経験の有無による「留学生の日本人イメージの推測」の違いは明らかにされなかった。

図2 日本人についてのイメージ・印象



〈性格の自己評価〉

人が自分自身をどのように捉えているかを把握することは、他者理解において重要な位置を占める。同じ課題に対しても、肯定的な自己評価をもつ人は、否定的な自己評価の人に比べて、積極的、意欲的に取り組むであろうことが予測される。留学生に対して我々が通常いただくイメージは、日本人学生と比べて「ひたむきな」「ねっしんな」「真面目な」等に代表される、かつての日本人や学生のイメージが強いが、留学生達は自分自身をどのように捉えているのかを検討した。

留学生の自己像は「思いやりがある」「考えが新しい」「競争心が強い」「しんぼう強い」反面、「感傷的」ではないとしている。

このような留学生全体の回答とは別に、男性の回答のみ留学生（43名，理系35名・文系8名，平均31.1才）と日本人男子学生（48名，全員文系，20才前後，前述の調査対象）とを比較することにより検討を深めたい。

留学生は自己を

「思いやりがある」「考えが新しい」「競争心が強い」「しんぼう強い」と捉えるとともに、
「自己主張が強い」「直感力のある」

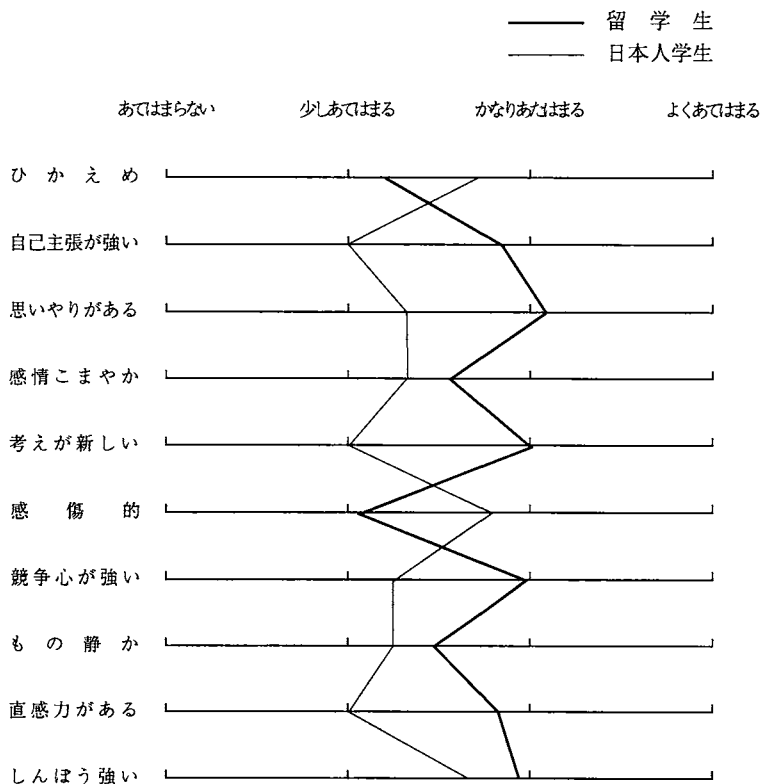
と意欲的・目的指向性が強いことを自覚している。一方日本の学生は、

「ひかえめ」「感傷的」「しんぼう強い」

と比較的消極的な自己イメージを持っており、両者から受ける我々の印象を裏付ける結果となっている。

これらについては二つの点が考えられよう。まず第一に発達の違いがあること。すなわちその平均年齢に見られるように、一般に留学生は既に目指すべきゴールを見出し、現在はそれに向かって努力している過程－アイデンティティ達成の状態－にあるのに対し、日本人学生は一応の進路選択はなされてはいるものの確定ではなく、自分のゴールを探している段階か、もしくは確定しないことの身軽さを享受している段階－モラトリアム－にあることがこれらの違いを生じている。第二には、個人の持つ意欲的・積極的な特性に高い評価を与えるかどうかという文化的背景の違いが考えられる。

図3 性格についての自己評価



(2) 異文化適応についての考察

アジア地域の留学生が日本を留学先とする理由には、学問的水準・奨学金に加えて地理的な問題

や文化的背景の類似度等のあることがこれまでの調査で指摘されている。事実、文部省の調査（平成2年度）でもほぼ9割がアジアからの留学生で、そのうちの85%前後を漢字圏からの留学生が占めている。これら言語をはじめ日本と共通点を持つ漢字圏からの留学生とそれ以外の地域からの留学生とでは日本で生活する際に体験するギャップの大きさには違いが見られ、それが適応上の困難に結びつくケースが起こっている。ここでは、日本での生活の受け止め方について漢字圏（38名）と非漢字圏（16名；アジア地域の回答のみでは少数であったためアジア以外の地域も加えた）について、その違いを明らかにしたい。

〈適応の際に感ずる障害の程度について〉 漢字圏・非漢字圏による違いの見られない項目として「日本の考え方」「外国人に対する日本人の態度」がある一方で差の見られた項目には、やはり「日本人とのコミュニケーション」「日本の食事」「過密な人口」が上げられ、三項目とも非漢字圏で困難度の高い傾向が認められる。コミュニケーションと一口に言ってもそこには言葉それ自体と言葉の背景をなす文化そのものの二要因があり、いずれの要因を取り上げても非漢字圏からの学生にはプレッシャーとなりうるということが予測される。また食事についても、宗教上の理由から食べることが禁止されている種類の食物があるため、例えば大学等の食事の際には細かくチェックしてから食べる様子は通常いくらかでも見られる。

〈日本の社会・文化・教育に対する意見〉 両群でやや異なった傾向の見られたものとしていわゆる「日本社会の閉鎖性」に関しての受け止め方である。漢字圏からの学生がより多くそれを感じるのは、元々受入れに対して高いニーズを持っており、その期待と現実のギャップがこのような違いを生じたと考えられるが、その他想定される要因も含めて今後の検討課題である。

〈日本人についての印象・イメージ〉 最も異なったイメージであったのは「つきあいやすい／つきあいにくい」「正直／不正直」で、いずれも非漢字圏がpositiveな評価をしている。ほかにも「信頼できる」「男女平等」の項目で差異が認められる。

図4 生活適応上の障害の程度

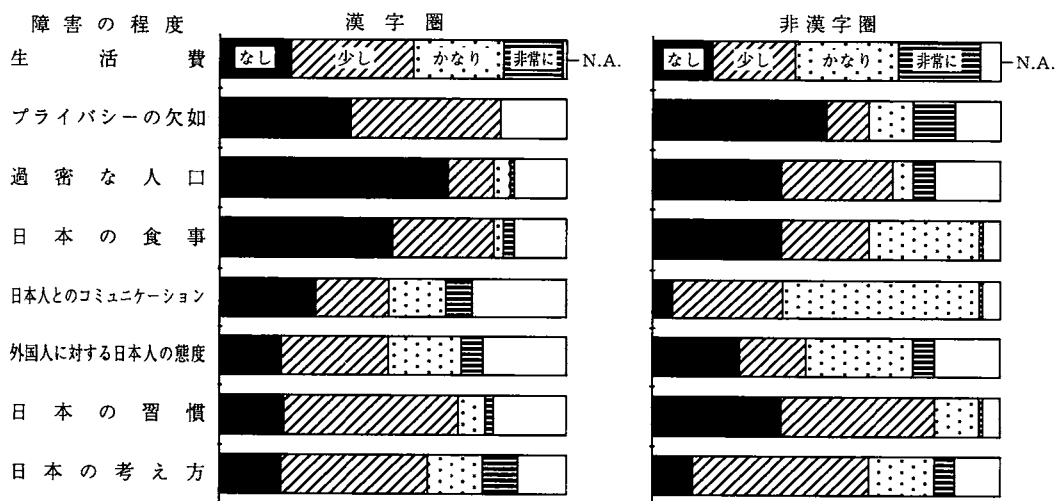


図5 日本の社会・文化・教育に関する意見

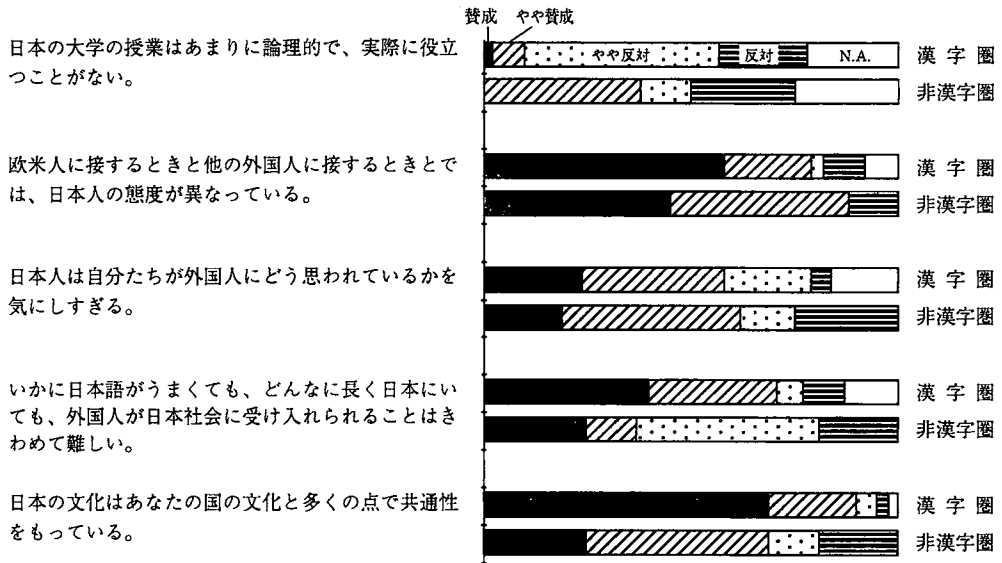
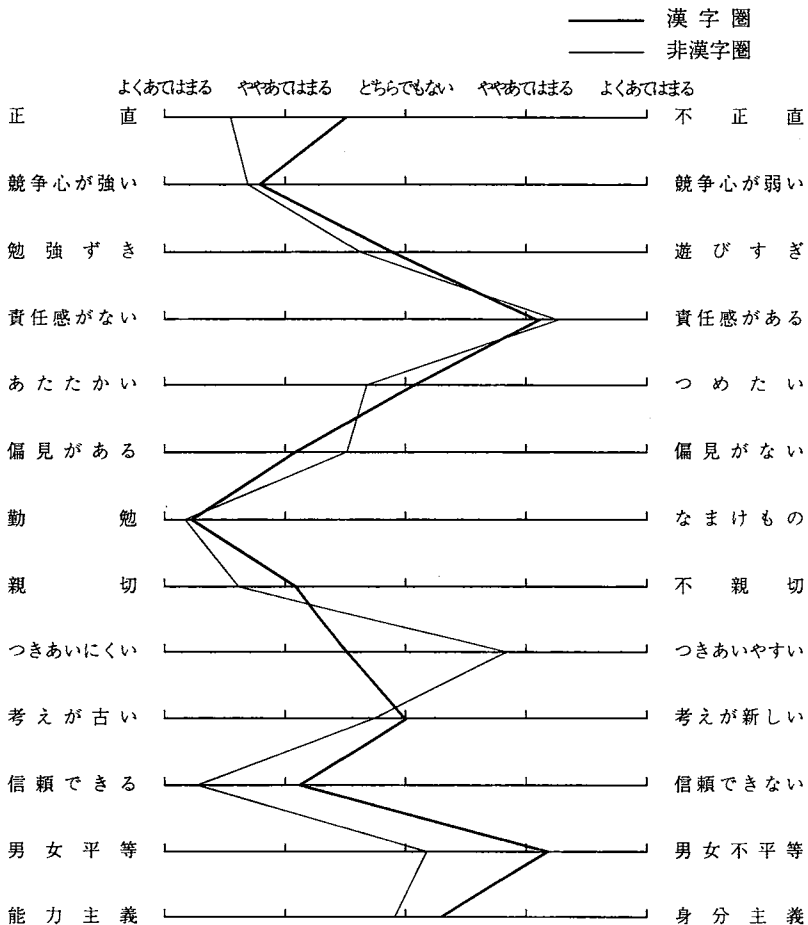


図6 日本人についてのイメージ・印象



〈全体的な考察〉 漢字圏・非漢字圏では認知される差異の側面には違いが見られ、とりわけ漢字圏が日本社会の閉鎖性を感じ、これと並行する形で日本人イメージをnegativeに捉える傾向のあることが明らかにされた。しかし現状ではそれが必ずしも不適応状態とは関連していないことが自由記述、面接を通して確認されている。

また、本調査では意識面のみを取り上げたが、実際に不適応を経験するか否かには、もっと多様な要因；すなわち頼りとするべき仲間の存在やノンバーバルレベルにおける問題などの諸要因が関わっている。同じ国からの留学生が多くいる漢字圏の留学生達の相互の助け合いは、不適応の予防的役割を果たしている。

したがって、一般的傾向ではあるが、やはり自国との文化的ギャップ例えばコミュニケーション手段、「学ぶ」ことに対する価値観、日常における行動様式、食生活の違い等のほうが不適応状態と結びつきやすいことが本調査からも示唆される。今回の調査で確認された点を踏まえ、調査対象を増やすとともに、留學生理解に結びつく質問項目の精選、さらには面接調査との併用による検討など残された課題は多い。

引用文献

- (1)近藤裕 1981 カルチャー・ショックの心理 創元社 60-118
- (2)岩男寿美子・萩原滋 1988 日本で学ぶ留学生 勤草書房 55-73 222-232 資料 1-23
- (3)文部省編 1991 わが国の文教施策 大蔵省印刷局 520-541